

十文字学園女子大学人間生活学部紀要第4巻 2006年

発達相談における聞き取りから助言に至る過程が  
時間経過の中で変化する様相  
—不登校事例の面接記録の分析—

The Aspect of Changes in the Process from “Hearing to Advice”  
during the Passage of Time in the Developmental Counseling  
—Case analysis of school non-attendance—

岡村 佳子

Yoshiko OKAMURA

要 旨

この論文は、不登校事例の面接記録（岡村、2004）の中で行われた助言の過程について、時間経過の中にみられる変化の様相を分析したものである。

相手から話を聞き取り、助言するまでのプロセスとして次のようなものがある。

A：聞き取りから話を再構成する。B：再構成された話を母親に伝える。C：質問や悩みに対する応えを用意する。D：助言（日常生活の意識化、身体の気づき、身体と生活環境との統合）である。これら4つのそれぞれについて分類を行い、時間経過のなかでの「どのように変化するか」について調べた。

その結果、1年半にわたる16回の面接のなかで、初期には助言が行われる。中期には、助言内容をクライアント自らが実践していることを再構成して伝えることが中心になっていく。後期には、助言内容と同様のものが自発的に発生していることを再構成して伝えることが行われていることが、明確にされた。

はじめに

1) 発達相談とは何か・定義

発達途上にある子どもたちがなんらかの行動上の問題を持つとき、養育に当たる人（母親や、

---

十文字学園女子大学人間生活学部人間発達心理学科

Department of Human Developmental Psychology, Faculty of Human Life, Jumonji University

ランニングタイトル：発達相談における聞き取りから助言に至る過程が時間経過の中で変化する様相

キーワード：発達相談 助言の過程 時間経過 変化 面接記録

父親といった家族の人など)や教育する立場にある人(保育士や幼稚園教諭、学校教師)に対して、相談施設(病院や児童相談所、研究所など)において臨床発達心理士や臨床心理士が日常の適応と子どもの発達にむけて助言や指導、援助を行うことをいう。

## 2) 誰が発達するのか・関係性の発達

さて、通常行われている相談において、考えなくてはいけないことは、一体、誰が発達するためのものなのかということである。親や教師達は、子どもが発達すれば、相談の目的は達成したと考えがちである。

しかしながら、子どもが発達するとき、親や教師たちは発達していないのであろうか。実は、子どもをとりまく親や教師たちも発達しているのである。なぜなら、親子や教師と、児童・生徒といった関係において、子どもだけが変化し、発達するということはないのである。通常、相談の結果、関係が改善されているのである。

このように親子、教師と児童・生徒といった関係にある人達に相談を行うとき、必ずしも両者の相談を行う必要がない場合がある。もちろん自発的に相談を受けたいと両者が望む場合は別である。

通常どちらかひとりが相談を受けることを希望して来所することが多い。このような時、相談に来た人を中心にして親子なり、教師と生徒などの関係を改善していくことは可能である。

関係性の発達をいうなら、ひとりが変われば相手も変わると考えられる。今回の相談事例は不登校の中学生をもつ母親の相談である。子どもはみずから相談を受けたいとは考えていない。母親は、もし自分が子どもの不登校のことで悩んでいたら、おかしくなりそうだということで来所したのである。

この場合、思春期の子どもはまだ十分自己をみつめる力がないため、何が起きているかが分からない状態にあるとよい。しかし、自分が学校に行きたくないから、行かないということは、はっきりしているようである。

## 3) 助言の不透明性

実際に行われている発達相談では、カウンセラーがどのように聞き取りを構成し、どのような助言をするかについては、面接記録をとっている。しかし実践発表では、この部分が明確には表現されていない。

たとえば、主訴やアセスメントについて述べられたあと、カウンセリングを受けることになり、よくなったという書き方になっている。(中島他、2003)

横川(2006)では、障害児への家族支援として、発達診断、母の思い・相談としてカウンセラーが母親に助言した内容について、7回分の発達相談の内容が記載されている。このようなカウンセラーの自己開示の姿勢は、今後必要とされられると思われる。しかし、この場合も、さらに望むならば、親の発達変化としてだけでなく、カウンセラーと母親の相互交渉としてみいく必要がある。

## 4) 面接記録の分析

相談の再現可能性を求める時、面接記録の分析が必要になってくる。一般には、以下のような形式をとっている。

- (1) 母親の話しの内容をまとめて伝える。
- (2) 悩みについて質問があった場合、本児ならびに家族構成員について、発達の観点から助言する。すなわち、袋小路に入ってしまうことがないように、開かれた道に出るような発達の方向づけを心がけて助言する。
- (3) 現実見当識をわきまえた観点、すなわち、今ここで何ができるかを考えて、できることを実践していく生活実践的観点から助言する。

(岡村、2004)

以上のように発達支援を意図して、相談は開始されていくが、回をおって流れが出てくる。カウンセラーの役割も聞くだけになったり、承認するだけでよくなったりしてくる。

今回、16回(約1年6ヶ月)にわたる相談の中で、クライアントとカウンセラーの関係の変化を相談・助言の変化のなかに求めていく。そして変化の様相を検討してみる。

## 1. 目的

発達相談においてカウンセラーの行う助言がクライアント—カウンセラー間の2者関係の中でどのような行われているか、そしてそれらはどのように変化していくかを調べる。

次にその助言がクライアントの日常生活に取り入れられていく過程、そして安定した日常生活をおくれるようになっていく過程について、調べることを目的とした。

分析対象とした面接記録は、面接時間中に行った母親からの聞き取りとカウンセラーの助言を記述したもの(全16回)を、さらに回ごとにまとめて記述したもの(岡村、2004)である。

## 2. 方法

### 1) 事例の概要

ある私立総合病院の相談室へ訪れた不登校児の母親面接をまとめたものである。相談員は筆者である。

母親のみが来談した。母親からの聞き取りや母親への児に対する生活指導を行うことによって好転したケースである。

この事例は基本テーマとして児の思春期と母親の更年期を、広い意味での母子分離現象として捉えている。さらに進んで、世代交代といった文化的現象の一現象として不登校を捉え、母から児への文化(主に食文化)の伝達を目標にして生活指導を行うように助言したものである。児は一人子の男子で14歳である。体格は身長が165cm、体重は45kgである。中一の時、震災を経験する。

思春期の母子分離と父子分離のための工夫として部屋の配置を考えてみた。身体的に成熟した男子が自分の独立した居場所が持てるように配慮して、父の部屋から距離的に遠い部屋を児の部屋とした。

母親には日常の暮らしを、自分の身体意識を取り戻すことで見つめ直すように助言した。具体的には母親が作成してきた基礎体温表に、さらに母自身の体調と機嫌を自己判定して書き込む作業をしてもらった。また、日常の工夫として、父のための食卓ではなく、児のための食卓を用意する必要を伝える。その第一歩として、ノート法(朝食、昼食、夕食のメニューを書き出し、児が喜んで食べたものに◎、普通に食べたものに○、いやいや食べたものに△、食べなかつ

たものに×をつけておくやり方) (岡村、1995) を伝える。

母親に基礎体温を高温を保つ工夫を紹介する。同性の気のあう友人とおしゃべり、買い物、適度の運動 (散歩や水泳など)、温食物を摂取すること、疲れすぎないといった工夫などを伝える。

「兄や夫とのけんかを恐れず、やってみよう」「男だからこわいといった意識がある場合、勇気を出して思ったこと、感じたことを口に出してみよう」と伝える。

母親や妻という大儀名文により、自分ひとりで家計のやりくりをしていると出費が少なく抑えられるが、家族内での個人の自由も抑えられてしまうことが多いことを説明する。衣食住の世話にお金を惜しまないことや、家族3人が自由に衣食住を選び、共生できるように、経済的に許される範囲で出費をおしまないことを助言する。

父方の祖父の世話を弟夫婦よりひき継ぐことになった。

以上の経過を経て、家族成員のそれぞれに次のような発達が見られた。

①母子分離の完成：日常生活や友人との付き合い、進路などについて、兄は自分で判断し、決定することができるようになった。

②父子関係のはじまり：兄は同性の父と進んで関わるようになった。

父を批判して自分の上位を主張する一方、父をたてて父を尊敬していこうという姿勢がみられるようになった。

一方父もその実父の老後の世話をする覚悟ができた。父から息子へという世代性を獲得した。

③母の発達・自明性の展開：個人をとりまく背景として比較的明確である事実について意識化できるようになった。

## 2) 分析方法

①相談の過程については、聞き取りから助言にいたる過程を、時間の流れの観点から次のように設定した。

A：聞き取りから内容をまとめ、カウンセラーが話を再構成する。

母親が構成した話を聞き取り、母親の話を再構成している。カウンセラーの行った再構成の内容について分類する。

次の3つに分類される。

### ・ a---1：存在肯定

母親のやっтерことを認める。なぜそのような事態になっているかについて肯定できるような話を作る。クライアントが現実を受け入れることができるように、納得できるように話を再構成する。

### ・ a---2：助言 (d1-d3) の実践

母親の話を助言 (d-1 から d-3) の実践ができているものとしてまとめる。

### ・ a---3：統合の発生

母親の話を、現実を意識化すること、身体の気づきや、自我が生活環境や社会のなかで現実を受け入れられることができてきているものとしてまとめる。

B：再構成された話を伝達する。

再構成された話を母親に伝えている。伝達の方法について、分類する。

次の6つに分類できる。

• b---1：発達筋道

発達の筋道であると伝える。

• b---2：発達のでない

発達の可能性が少ないと伝える。

• b---3：現象の説明と解釈

母親や子どもの現実の行動を発達理論から説明し、解釈をして伝える。

• b---4：言語化

母親の話を、現実を意識化すること、身体の気づきや、自我が生活環境や社会のなかで現実を受け入れられているものとして言語化している。

• b---5：承認

母親や子どもの生活状況を聞き、そのままよいと答える。

• b---6：発達の方向付け

現状肯定から一歩進んで先の見通しを伝える。

C：再構成された話に関する質問を受ける。

一回出現しただけなので分類は行わない。

D：助言

現実見当識と生活実践と発達の方向づけという3つの観点から助言を行う。その助言の内容について、分類する。

次の3つに分類される。

• d---1：無意識に気づく

現実の生活に無意識に入り込んでいる枠があることを理解してもらう。すなわち自分が置かれている状況の中で、他律的なもの（例えば継承している文化）について注意をはらうことを助言している。

• d---2：自分の身体を知る

自律的な面としての自分の身体の状態を知る方法を伝える。例えば、基礎体温の測定や食事の書き出し（ノート法）を紹介する。

• d---3：身体と現実環境の統合

身体（d-2）と生活環境と社会（d-1）の統合に向けて、今できることを中心に助言する。

②この相談は約1年半に渡って16回行われている。この間の時間経過に伴う変化をみていく。

### 3. 結果

1) 16回の流れにみられる変化について、面接記録のまとめたもの（岡村 2004）から、やりとりの流れを細かく分類していく。

### <一回目の面接の分析>

A :

- 家族構成や生育歴についての聞き取りは、一般的な発達に関するものといえる (a-1)
- 家族構成は家系図として図示しておく、世代間連鎖についての情報が得られる (a-1)
- 母子の年齢から、母が何歳の時に産んだ子どもかが特定できる。(a-1)
- 生育歴のなかで、母の就業状況(専業主婦)、乳児期の栄養状況(3歳まで授乳)、夜尿の有無等から、母子関係のありかたが推測できると伝える。(a-1)

B :

- 聞き取りをまとめて、児の発達には問題がなかったことを伝える。(b-1)

A :

- 思春期の身体の成長について情報が得られる。自立に向かう身体的準備ができているかどうか分かる。(a-1)

B :

- 身体的に年齢相応の成熟がみられると伝える。(b-1)

A :

- 1年前震災にあった。そのときから、家族が一緒に一室で就寝している。このような自然災害は家族一人一人に不安感を抱かせたと思われる。その解決策として、一緒に固まって寝ることとなった。(a-1)

B :

- 思春期に両親と一緒に寝るとするのは不自然であると伝える。(b-2)

D :

- 家族の一人一人が不安に思う気持ちは、理解できるが、安心できる状況がきたら別室で寝るのが自然である(K. ローレンツ、1981)と示唆する。分離の工夫として別室就寝を勧める。部屋の配置を考える。(d-1)
- 父親の部屋から空間的に離れた部屋を児の部屋とするように提案する。男同士の独立性を保つためであると説明する。(d-1)
- 母親に自身の身体の状態について気づいてもらう。ノート法の一部(注2)を実践してもらう。体調を知り、不自然な家事や家族の世話をやめるように伝える。機嫌よく暮らすことが家族にとっていい環境になることを伝える。(d-2)
- 児の自我を育てるためにリラックスした家庭環境を作るように助言した。(d-3)

### <二回目の面接の分析>

A :

- 食事に関する聞き取り(食事を作る時、だれを1番にイメージして作るかを尋ねた)から、家族のタイプ(夫婦中心型か子ども中心型かバランス型)を知る。(a-1)

B :

- 夫婦中心型であると伝える。(b-3)

A :

- 児が母の持つ文化規範からそれた行為をしても、母が許容し、それを記録している。(a-1)

D :

- ・ 父親（夫）のための食卓ではなく、児のための食卓を用意する必要を伝える。日常の食卓への気づきを促すため、ノート法を実践してもらう。(d-1)
- ・ 母親が作成してきた基礎体温表に、さらに母親の体調と機嫌を自己判定して書き込む作業をしてもらう。(d-2)

#### <三回目の面接の分析>

A :

- ・ 母親から母自身の体調の報告を受ける。(a-2 : d-2 の実践)
- 児は自分の身体を中心にした生活になってきた。(a-2 : d-2 の実践)

B :

- ・ 児の自律的側面が発生してきたと伝える。(b-1)

A :

- ・ 母親は、体調がよくなってきたら、周囲の人が信じられるようになってきたという。(a-1)

B :

- ・ 生活主体としての自我が意識されてきたと伝える。(b-1)
- ・ 母親は、体調の良い時動きたくなることを自覚し始めていることを確認する。(b-5)

C :

- ・ 趣味から遠ざかっているということに対して、これでいいのかという質問があった。「それでいいですよ、気持ちのいいようにやってください」と答えた。

D :

- ・ 母親は、身体リズムを当然のものと無意識に受け入れていたことに気づく。(d-1)
- ・ 思春期の特徴を意識化してもらう。(d-1)
- ・ 児にも体調があること、そこから清潔感が出てくることを説明する。(d-3)
- ・ 食事、清潔に関して母の体調が悪い時、やりたくない時、児が一人のできるようになるよいチャンスだと伝える。(d-3)

#### <四回目の面接の分析>

A :

- ・ 母は子育ての振り返りをしている。(a-2 : d-1 の実践)
- ・ 基礎体温の計測をしながら、さらに進んで基礎体温をあげる工夫をしている。(a-2:d-2 の実践)
- ・ 児の観察から、子どもの変化に気づく。文脈の中で児の行動をとらえることができるようになった。児を肯定的に受け止めている。(a-2 : d-1 の実践)

夫の観察から夫を肯定的に受けとめている。(a-2 : d-1 の実践)

D :

- ・ 同性の友人とおしゃべりの効果、買い物による効果、温食物の効果などの意識化を伝える。(d-1)
- ・ 夫や児とのけんかをする必要性を伝える。(d-1)

- ・家計は家族の希望をかなえる必要があると伝える。(d-1)

#### <五回目の面接の分析>

A :

- ・母親が自らの生活を築く工夫(日記や家計簿)を始める。(a-2:d-1の実践)
- ・記録していると事実と主観、感情を分離して捕らえるようになる。自己の内面について意識化できるようになっている。(a-2:d-3の実践)
- ・実母をはさんで姉と自分との葛藤が意識化されてきた。(a-2:d-2の実践)
- ・夫や兄の感情変化(荒れてきた)に気づくようになった。母親が自身の感情変化に気づき、表現し認めることができるようになり、同じことが夫や兄に起きることを容認できる。(a-2:d-2の実践)

D :

- ・家族成員3人がストレートに気分を表現できるようになってきたので、自分をまず表現して、その後で3人が互いに調整するとよいだろう。(d-3)
- ・兄の意思を尊重して兄に従ってみて、その結果で兄の成長を確認してみよう。(d-3)
- ・自己の統合について文章化してみるように伝える。母親には、自分が考えたり、思ったりしていることを日記にまとめて書き出してみることをすすめる。(d-3)

#### <六回目の面接の分析>

A :

- ・母親の基礎体温と体調の報告。36℃以下がなくなってきたのは望ましいといえる。(a-2:d-2の実践)
- ・子どもと対面することが大切だと解ったという。(a-2:d-3の実践)
- ・実家の姉との葛藤が解けてきた。(a-2:d-2の実践)
- ・過去の振り返り。今まで男が恐かったのではないかと思う。(結婚生活を振り返るようになる。(a-2:d-1の実践))
- ・母親は、社会的枠をはずして本人の行動を見守れるようになった。どうしても許せないことについては、母親が兄をたたいてさとすことがあった。(a-3)

B :

- ・一体化から関係性が発生し、次に対等の立場でコミュニケーションが発生してきている。現状のままでよいと伝える。(b-5)

#### <七回目の面接の分析>

A :

- ・母子の一体化と信頼が確認される。  
母親は、兄が自分をにらみつけても兄の目の奥にこわさのない顔が見えるので安心だと報告。本人で登校を決めるように告げている。(a-2:d-3の実践)
- ・母子の関係性が確認される。兄が学校に行かない時、対策を考えるのが母の仕事だからという。母は兄の昼食を工夫しているという。(a-2:d-3の実践)
- ・母と対話するようになった。母に、兄が自分の気持ちを説明することができるようになってきたという。(a-2:d-3の実践)

- ・・児は、異性に興味が出るようになった。(a-2：d-3 の実践)

B：

- ・・発達の筋道を伝える。(b-1)
- ・・母子分離の条件は、友人がいることと、母親以外の他者、例えば特定の友人に本音が言えることであると説明する。(b-3)
- ・・それらの条件がそろってきていることを伝え確認する。(b-5)

#### <八回目の面接の分析>

A：

- ・・母の自我確立（“いや”と言える）(a-3)
- ・・児の食の自立（自分で食べ物を選ぶ）(a-2：d-3 の実践)
- ・・母自身の自我の確立により、夫や子どもの安定した観察（良い面を見る）ができるようになった。(a-3)
- ・・母—息子から父—息子への関わりが発生する。男子としてのアイデンティティ確立へ向かう。(a-2：d-3 の実践)

B：

- ・・自己の視点を離れ、他者の視点がとれるようになっていくことを伝える。(b-3)
- ・・家族成員が共同性を持つ必要性を説明する。(b-3)
- ・・母に個性化への道を進むように示唆する (b-6)。

#### <九回目の面接の分析>

A：

- ・・分離後の自らのフォローとして、日記を書き、セルフコントロールしている。(a-2：d-3 の実践)
- ・・児の安定を読み取る観察ができていく。(a-3)
- ・・母は自分の生活や実家との関係をふりかえる。(a-3)
- ・・児の食行動を安定した状態で観察をしている。(a-3)
- ・・母の作った料理をおいしいという日が出てきた。(a-3)
- ・・児が母を評価し、心理的に対等の立場で援助を求めるようになってきた。共同性がでてきた。(a-3)
- ・・父を観察して呼称が変化する。父の自分に対する愛情面の変化に気づく。(a-3)
- ・・母が父の存在を受け入れるようになっていく。そばにいても違和感がない。(a-3)

B：

- ・・このままでいいと、現実肯定する。(b-5)
- ・・児—母関係、父—母関係が安定してきた。(b-5)
- ・・児の変化、父の変化、母自信のふりかえりから発達の方向付けがでてきている。(b-6)

#### <十回目の面接の分析>

A：

- ・・児の変化、父の変化、母自身のふりかえりを報告してくれる。(a-3)
- ・・児と母の関係、父と母の関係の発展（関わることから好き嫌いの発生へ、さらに自我によ

る環境選択ができる段階に達する)が読み取れる。(a-3)

B :

- このままでいいと、現実肯定する。(b-5)

#### <十一回目の面接の分析>

A :

- 母は自分の変化に気づく。(a-2: d-2の実践)
- 母は仲間と交わり、自分自身をみつめ、認める。(a-2: d-3の実践)
- 父と児の観察をして、父子の対立を見守ることができる。(a-3)
- 父の変化を観察している。(a-3)

B :

- このままでいいと、現実肯定する。(b-5)
- 3人とも自我確立していることが伺える。(b-3)

#### <十二回目の面接の分析>

A :

- 母は日常生活の枠をはずせるようになった。(a-2: d-1の実践)
- 家族3人がそれぞれの体の自律性に気づくようになった。(a-2: d-2の実践)
- 母は日記をつけて自分のふりかえりをしている。(a-2: d-2の実践)
- 3人がばらばらだったが、父は家系図を持ち出してまとまりを強調している。(a-3)
- 母は父を肯定的に受け入れる観察をしている。(a-3)

B :

- このままでいいと、現実肯定する。(b-5)
- 児が父を乗り越え、父と自分の両者を大切に、かつ相手も大切にするといった、対人関係の言葉を児が使えるようになったことを評価しようと伝える。(b-6)

#### <十三回目の面接の分析>

A :

- 児の観察から児が父子の葛藤を乗り越えたことが伺える。(a-3)
- 父の観察から、父が父子の家系的つながりを意識かでき、息子に自分をみるできるようになったことが伺える。(a-3)
- 母のふりかえり。児の登校にたいして過敏に反応しなくなったという。(a-3)
- 母は、児を観察しながら、児の自我確立に伴い、息子を信頼して環境を切り開いていくことができるであろうと思える安心感を手に入れている。(a-3)

B :

- このままでいいと、現実肯定する。(b-3)

#### <十四回目の面接の分析>

A :

- 母と児は、コミュニケーションができるようになった。(a-3)
- 児は不登校した自分を肯定的に受け入れることができるようになった。(a-3)
- 母は父に共感できるようになる。(a-3)

B :

- 母が現実肯定的な読み取りができてきていることを伝える。(b-1)
- 非行と逃避はコインの裏表のようなものであると説明する。(b-3)
- 不登校を、適応のための逃避であったと言語化できて児が自信を持てたことを伝える。(b-3)

#### <十五回目の面接の分析>

A :

- 母が仲間を求めて活動しているという。(a-3)
- 母は自己肯定する。不登校を肯定する資料を集める。家族をありのままの姿で肯定できるようになった。(a-3)
- 父が家族とコミュニケーションするようになった。(a-3)

B :

- 母自身が社会的に行動していくことで、母子分離が可能になったと説明した。(b-3)
- 現実進行している現象を言語化する。(父、母、子どもといった固定した役割から、対等な個人として、3人が互いに助け合い、補い合う関係がもてる家族へと変化してきたことを伝える。)(b-4)

#### <十六回目の面接>

A :

- 母が個として再出発する。成人期の生涯学習に取り組む意思をもつ。(a-3)
- 児の高校合格により、家族と離れ寮生活を始める決意をした。(a-3)
- 父は家系の中で自己の存在的位置を認めるようになる。実父と同居を決めた。(a-3)

B :

- 現実進行している現象を言語化する。(b-4)
- 父は長男としての役割をとることができるようになったと説明する。(b-3)
- 先に生まれた先占権のある長男が下の兄弟につくしてあげる度量の大きさを持っていると説明する。(b-3)
- 過去から未来を統合するように示唆する。(母に、これから先の自分の生き方を考えてみよう伝える。)(b-6)

2) 16回の流れの中での変化は、それぞれ A,B,D について、表1、表2、表3に示した。

表1 A の変化

	a-1：存在肯定	a-2：d-1、d-2、 d-3の実践	a-3：現実の意識 化、身体の気づき、 統合の発生
1回			
2回			
3回			
4回			
5回			
6回			
7回			
8回			
9回			
10回			
11回			
12回			
13回			
14回			
15回			
16回			

\*斜線は出現を示す

表2 B の変化

	b-1：発達の 筋道	b-2：発達の でない	b-3：現象 の説明と解 釈	b-4：言語 化	b-5：承認	b-6：発達の 方向づけ
1回						
2回						
3回						
4回						
5回						
6回						
7回						
8回						
9回						
10回						
11回						
12回						
13回						
14回						
15回						
16回						

\*斜線は出現を示す

表3 Dの変化

	d-1:無意識に気づく	d-2 自分の身体を知る	d-3 身体と環境の統合
1回			
2回			
3回			
4回			
5回			

\*斜線は出現を示す

#### 4. 面接記録の分析と表1-3についての考察

##### (1) Aの変化について

- 1) 1回から3回にかけて存在肯定の話をしている。
  - 2) 3回から12回にかけて助言の実践について話をしている。
  - 3) 5回から変化が見られる。クライアント自身の中から自分自身と自分の置かれている環境について受け容れが見られる。自己と環境の統合には、3段階（受け容れる、満足する、自信がある）があるが、今回はこれについては分析をしていない。
- る。
- 4) 9回から、母の自我が安定してくる。それによって周囲の人に対して客観的な観察ができてくる。夫や子どもの状態に気づきが出てくる。それによって、よい関係がもてるようになる。
  - 5) 13回から生活の中で「発生する」ということばで表せるような、新しい局面が自律的に展開してくる話として再構成している。
  - 6) 15回から、過去と現在の統合が完成してくるので、未来にむかってさらなる統合をめざす生き方として話を再構成している。

##### (2) Bの変化について

- 1) 6回目からは助言(D)に代わって、承認(B-5)が出てくる。
- 2) 1回目だけに発達のでないという指摘(b-2)がでてくる。
- 3) 現象の説明と解釈(b-3)はよく(16回中8回)使われている。
- 4) 8回では、方向づけとして伝えられている。個の確立から共同性への発展を示唆している。家族のそれぞれが個として存在感を得て、必要に応じて他者の視点や役割がとれて、助けあえる共同性をもつように方向付けている。

##### (3) Dの変化について

- 1) 1回-5回の面接では助言がみられた。
- 2) 1回-4回では、日常生活の意識化を促すこと(d-1)が行われている。
- 3) 身体への気づきは、1回-2回の助言によって、できてくる。実行されやすいようである。
- 4) 統合にむけての助言(d-3)は1回、3回、5回で終わっている。

## 5. おわりに

### 1) 不登校の子どもについて母親を面談することで、登校が可能になるのか？

団(2000)によれば、不登校など子どもの問題行動を解決する場合、犯人探しをするのではなく、家族システムとして捉えることが効果的である、としている。この事例においても、母が12回目の面接で子どもの問題を自分が悪かったのではない、みんなの問題なのだと話している。さらに母自身が更年期の身体を意識化することで自律を再獲得したことにより、新しい母子関係と夫婦関係を作り出すきっかけになった。そして家族システムに変化をもたらしたといえる。

もうひとつの考え方として、林(2005)の見解があげられる。母親は、セラピストの代理的自省による共感と受容によって自己愛の傷つきから立ち直っていくという。セラピストとの相互作用は、息子のひきこもりにもよい相互作用をうみだしたという。本人が面接場面に現れないひきこもりの問題に、精神分析的心理療法が効果的に働く事例を紹介している。母-息子関係がセラピスト-母関係とパラレルに捉える視点がある。今回の事例では、このような相互作用はなかったとはいえないが、明確ではない。

さて、今回の事例では、母親が相談のなかでエリクソンがあげた中年期の対立命題、ジェネラティビティ対自己-耽溺と停滞からくる危機(串崎、2005; やまだ、2000)を乗り越え、成長していくプロセスが伺える。

### 2) 受容と共感のレベルについて

カウンセリング・マインドの中核をなす概念として受容と共感がある。これについては、(イ)身体レベルと(ロ)感情レベルとさらに(ハ)認知レベルがあると考えられる。身体レベルとは、同性とか同年代のエントレインメントがあげられる。カウンセラーの身体がクライアントの身体に同調することからくる体験を指している。次に感情レベルであるが、これはクライアントが現す感情表現に対してカウンセラーが感情的に同化することである。認知レベルとは、クライアントがもつ個人的信念と文化的環境を考慮し、現在おかれている立場を理解することで、クライアントがそうなるのも当然だと納得する受け入れ方である。

(イ)と(ロ)については、その場面に限られる反応であるが、(ハ)に達するためには、異文化理解や年齢や思考スタイルからくる絶対的経験量の違い、発達段階からくる認知の違いを考慮する必要があると出してくる。

クライアントが現実肯定できて、より深い自己愛に達し、今日、今あることがこれでよかったのだと受け容れる事ができるには、クライアントが話す内容を再構成することで、クライアントが受け容れやすい話にすることが、必要であろう。

このような再構成に関してクライアント自身が話していく中で自発的に生じるとする考えがある。Bruner(1999)は、人が自らについて語ることが、平素の生活の通常性に生じた例外的な逸脱性を理解可能な形にし、再び通常性を取り戻す機能をもつという。(野村、2005)

今回の事例では、母が身体の自律を回復する時点まではクライアントの話す話を再構成した。

同時に親子発達ノート法を紹介し、ノートを共に見るなどしてフォローした。身体の自律が明確になったところで、カウンセラーは母親自身の語りを聞くだけでよくなった。ブルーナー(Bruner, J.S., 1999)のいうように自発的に再構成できるような力を、母親が持てるようになって

たと思われる。

### 3) 身体の自律から、社会に適応的に自律することについて

岡田 (2004) は、身体の自律の要件として、自由が与えられていることと他者に対する信頼をあげている。この事例では、4回目の面接までは、他律を排除して自由を与えるような助言が見られる。5回目からは他律から開放され、自律の世界に入ったことが伺える。また、他者への信頼は、身体が自律性を獲得してきた3回目の面接の時期からでてくる。そして、「他人が信じられるようになってきた」というクライアントの語りにあるように社会適応が発生してくる。

### 4) 相談におけるインターフェイスの関係について

相談は、クライアントとカウンセラーの2者関係から成立している。ここで、クライアントの要因は記録されていくが、カウンセラー側の要因は記録されないことが多い。今回記録されている内容から、クライアントの要因とカウンセラーの要因を分けてみる努力を、聞き取りから、助言にいたる過程について行った。どちらかが一方的に話すだけとか、または聞くだけとかではなく、両者が発展的に関わっていけるように、語り手の話を聞き手が再構成して伝えている。このような聞き手の再構成についても詳細に内容が示されている。

従来の事例研究で相手のみの記録を残すことに重点が置かれてきたことは、反省の余地があると思われる。

### 5) 生活と抽象された理論との関係について

生活は時間、空間的に一回かぎりのものであり、このことは生活者であることがいかに複雑な決定をしながら生きているかを示すものである。相談においては、クライアントがこの生活者であることを最重要として扱う視点が要求される。クライアントが過ぎたことを振りかえる時に、このことは特に重要である。理論や理屈は、過去や現実の具体的な時間や空間における多様な要因を少なからず抽象化してつくりあげるものであるから、自らをそのような理論にあわせて行動化を試みることは避けなくてはいけないであろう。岡田 (前述) のいうように、理論化に際して行う環境要因の特定化は、非常に単純化された時空の世界に住むことと共通しており、変化・流動する社会で、生活者として適応的行動をとるには困難を生じることとなるからである。

今回の事例では、ノート法によってつねに生活空間とクライアントが構成する空間が、書くことによって関係付けられていっている。このことによって、クライアントにとって抽象度の高くない時空が用意され、動きやすい生活空間をもたらすことになった、といてよいであろう。

## 参考文献

- 1 岡田敬司 「自律」の復権 (2004) ミネルヴァ書房 pp. 21-26、pp. 14-16
- 2 岡村佳子 親子発達とノート法 (1995) 幼児の教育 94巻8号 pp. 50-56 フレーベル館
- 3 岡村佳子 不登校から登校へ—生活指導を中心にした多面的アプローチ (2004) 十文字学園女子大学人間生活学部紀要第2巻 pp. 145-155
- 4 串崎幸代 E.H.Erikson のジェネラティビティに関する基礎研究 多面的なジェネラティビティ

- 尺度の開発を通して (2005) Vol.23 No2 pp.197
- 5 K.ローレンツ 日高敏孝、久保和彦共訳 (1981) 攻撃、悪の自然誌 2 みすず書房
  - 6 団士郎 不登校の解放 (2000) 文春新書
  - 7 中島誠編 増補発達臨床心理学 (2003) ミネルヴァ書房 pp.77-80
  - 8 野村晴夫 構造的ー貫性に着目したナラティブ分析：高齢者の人生転機の語りに基づく方法論的検討 (2005) 発達心理学研究 第16巻 第2号 pp.109
  - 9 林知代 ひきこもりの息子をもつ母親との心理療法過程ー代理内省としての共感による断片化した情動統合へのプロセス (2005) 心理臨床学研究 Vol23 No2 pp. 185-196
  - 10 Bruner、J.S. (1999) 意味の復権 (岡本夏木ほか、訳)  
(Bruner、J.S. 1990 Acts of meaning. Cambridge : Harvard University Press. London.)
  - 11 やまだようこ 喪失と生成のライフストーリー (2000) やまだようこ編 人生を物語るー生成のライフストーリー ミネルヴァ書房 pp.77-108
  - 12 横川真知子 相談事例にみる障害児への家族支援 清水民子他編 保育実践と研究者が会おうときかもがわ出版 (2006) pp.201-218